

年賀はがきは、正月の心を親しくする。少くも、賑かにする。

その人に、毎朝逢うものとすれば親疎の差はあつても、一々、グード モーニング というところを、一年三百六十五回分まゝめて、ハッピー ニュー イヤー ツー ニューという訳である。まゝめると却て手數だという人があるが、足數をかけないで舞いこませるところは、便利であり、初春早々能率的である。一生つゞけても、たかゞ七十八十回だ。

## 年賀はがき片々

倉橋 生

あんまり能率主義で虚例だという論も出るが、自他互に煩わすこと少なきは礼の初めなりともいえる。殊に、虚例かどうかは、こつち、あつちの心次第である。虚例の人はよせばいい。でも、気がすまなければ「虚礼につき欠礼」とコンニヤク版にしておけばいい。又郵便屋さん、熱いお茶の一つもあげて、「寒いところ御苦労さま」と、お礼をいえばいい。

筆者の心へ、年毎に舞いこむ賀状に、確

に虚礼でないのがある。

幼稚園出身の子達である。子達というが年齢は各々年々進んでいくのだから、いろいろである。鉛筆の「おめでとう」から始まつて、「おしようがつかおめでとうございませう」になり「謹賀新年」になり、一々「何学年」を書いてあるのから、中学になり誰々君も同級ですと近況を記しているものもある。字も、稚拙のひらかな名筆から、急に達筆になつていけるものもある。性質通り楷書のもあり、得意げな行書のものもある。去年までは、宛名はマザーに書いて貰つたのが、「母からもよろしく」と、ほゞえませるものもある。

そうして、近頃の吉例として、大体には返事を略させて貰つてゐる老無精も、この類のかわいゝ年賀はがきには、必ず返事を出すがその文言が年々歳々宛名の子供と共に進歩(?)してゆくのも目出度い。

## 保育應答研究会

倉橋先生を中心に、毎回御熱心な多数の方々の御参加により、終始活潑な討論と、和やかな雰囲気、盛會を得て居ります。

一月と四月迄は、種々の都合上、勝手乍ら、休会させていただきます。

フレイベル館内

保育応答研究会係

## 幼児の教育

第三卷 第一号 定価 金五十円

昭和二十八年一月二十日発行

東京都中野区千光前町一〇

編集兼 倉橋 惣三 発行所

東京都文京区大塚町三十五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 出版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレイベル館

振替口座東京一九六四〇番

本誌御購読について注文申込その他はすべて發賣所フレイベル館宛願います